

追悼黒佐和義先生・來期ノ櫻觀ル事能ハス

保科英人

〒910-8507 福井県福井市文京3-9-1 福井大学教育学部

Hideto Hoshina

I. 日本鞘翅学会例会で黒佐和義先生の知遇を得る

平成31年1月18日、本会会員で甲虫界の長老であらせられた黒佐和義先生が亡くなられた。まずは先生の御冥福をお祈りしたい。筆者はゴミムシ屋ではないので、先生と採集を御一緒させていただいた経験はない。筆者が先生の知遇を得たのは、かつて新宿区百人町にあった国立科学博物館で開かれていた日本鞘翅学会の例会時である。当時の例会の一人一話では、会員の皆様が盛んに珍品採集自慢や新発見の喜びを披露されていた。しかし、筆者が鞘翅学会の例会に出入りするようになった頃には、黒佐先生は既に同学会和文誌『甲虫ニュース』に論文を積極的に発表する研究の第一線から身を引かれていた。ある例会時でのこと。一人一話で黒佐先生の順となったが「僕はもう高齢だからお話しすることはない」とお断りされようとした。発言者が故高桑正敏博士だったか、新里達也元会長だったか、どなただったかは忘れたが、「せめてお名前だけでもお願いします」と促され、ようやく起立して遠慮がちに名乗られたことを今も鮮明に覚えている。

全くの余談だが、百人町に集まっていた旧日本鞘翅学会メンバーは、面子をあまり変えることなく、現在の日本甲虫学会の東京例会メンバーに移行した。当然の結果として参集する会員の平均年齢は単純に足し算されているわけだが、昨今の例会の一人一話は各自の採集成果報告ではなく、「腰が痛い」「肩が上がらない」「痛風に悩んでいる」等の“一人病気一話”になってしまった。数年前の東京例会だったのだろうか、筆者は順番が回ってきた時に「病気の話ばかりやんけ。気分だけでも若く行こうぜ!」と発破をかけたことがある。かつての活気溢れる珍品採集自慢大会を取り戻したいものだ。

さて、筆者は日本鞘翅学会で黒佐先生と知り合えたわけだが、先生の方から話かけられたのが切っ掛けである。なぜ先生がゴミムシ屋ではない筆者に気をかけてくださったのかはわからない。当時

筆者は日本学術振興会特別研究員として、ササラダニの権威である青木淳一横浜国立大学教授（現名誉教授）の元にいたので、それが先生に存在を知ってもらえた所以だったのかもしれない。

黒佐先生は「僕が本当に専門にやってきたのは甲虫ではなくダニなんだ」と、国立科学博物館玄関でご自身のダニ研究実績を筆者に立ち話された。ただ、誠に申し訳ないがその内容は殆ど覚えていない。また、ある例会時でのことだ。「君にこれをあげる」と小型標本箱ごと10数頭のデオキノコムシを筆者に下さったのである。筆者は別に「例会には必ず出席します」と周りに触れ回っていたわけではない。よって、黒佐先生は筆者がいつ例会に来てよよいように標本を準備してくださっていたのであろうか。恐縮の至りである。

II. 風化する大東亜戦争

筆者は平成13年4月に福井大学に赴任した。首都圏を離れたことで自然と黒佐先生とお会いする機会はなくなったわけだが、筆者は最晩年を迎えられた先生に再びご交際いただくこととなった。そして、今回は筆者の方から積極的に黒佐先生に連絡を取った。何を今さらと言ったところだが、以下に長々と記すその理由は全くもって筆者の私事である。

本学のとあるグループ総合学習型科目の時のことだ。昨今流行りの課題探求型のアクティブ・ラーニング科目というやつ。一人の女子学生が「戦後の日本は…」「戦後の福井県は…」などと、やたらと「戦後」との単語を連発するので、筆者に邪な悪戯心が芽生えた。「○○さん、先ほどから『戦後、戦後』と言ってるけど、戦争終わったのはいつ?」と聞くと、彼女は戸惑いながらこう答えた。「え〜と、昭和60年くらい…?」。唾然とした。福井大学は地方駅弁大学の一つであるが、一応歴とした国立大学のはずだ（そのように記憶している）。また、福井県は小学6年生と中学3年を対象にした全国学力テストで10年連続トップクラスを誇る学

力先進県である。なのに、その福井県内にある国立大学の学生は終戦の年を知らないと言うのだ。

これとはまた別のアクティブ・ラーニング科目での話だ。学生たちが神社林を実見したいと言うので、近くの護国神社に連れて行った。その折、たまたま神社敷地内にある戦争資料館が開館していたので、学生と共に見学したが、ここでも驚愕することとなる。護国神社の資料館なので、軍服や旧軍の武器、軍艦の模型、千人針、赤紙などが展示されているわけだが、学生たちは館内ではしゃいでばかり。そして軍艦の模型を指さして、「この船、空を飛ぶのかな？」と笑った。

誤解のないように言うておくと、うちの学生らは良い子ばかりである。捻くれた都会っ子（筆者のことだ）と違ってとにかく素直な地方の子である。だが、護国神社の資料館内には戦死された地区の方の遺影がずらりと並んでいる。今の学生から見て同年代の若者の遺影も少なくない。にもかかわらず、「この船は空を飛ぶのか？」との感想しか出てこないことに愕然とした（注1）。この日、資料館の入り口近くで御高齢の神社関係者の方が作業をされていた。当然、館内ではしゃぐ学生の姿は目に入っていたはずである。常日頃「大学生は子供ではないので、己の不始末の責任は自分でつけなければならぬ」（≒学生が何かしらかしても教官の責任ではない）と考える横着な筆者であるが、この日ばかりは「うちの学生は戦争のことを何も知らず、誠に申し訳ありません」と神社の方に何度も何度も頭を下げた。筆者が学生のごとで平謝りしたのは後にも先にもこの時だけである。

「大東亜戦争は風化しつつある。」筆者は危機感を覚えた。小学校や中学校は一体何を教えているのか、と憤激もした。大学生に「ツバメを描いてみる」と指示して、4本足のツバメの絵が提出されても、筆者は「小中の自然科学教育を是正する必要がある！」などとはこれっぽっちも思わない。「あんな、うちにこんなアホなヤツがおんねん」と笑い話のネタにして終わりである。にもかかわらず、筆者が「大学生が終戦の年も満身に知らない状況は何とかせねばならぬ」と決意した熱意の発生源がどこにあるのかは自分にもわからない。

筆者は「最近の若者は…」とお決まりの批判をするつもりはない。昨今の大学生が戦争をどこか遠いものと捉えるのはそれなりの理由がある。筆者の世代では戦争に行ったのは祖父である。一方、現在の学生からすれば、曾祖父である。祖父とは異なり曾祖父となれば親族感が一気に希薄になるは当然だ。よって、学生が戦争に関心を持って

なくなったとしても、一辺倒に批判するのは彼らにとって酷である。

平成末期の大学生は大東亜戦争を「第一次世界大戦の次の戦争」ぐらいにしか捉えていない（彼らには第一次世界大戦の次に満州事変と支那事変があったとの概念はない）。そして、彼らの思考はある意味では正しい。と言うのも、古代白村江の戦い以降、日本史即ち戦乱史である。江戸期260年そして敗戦以降我が国は「たまたま」平和な時期が続いているだけだ。つまり、一切の情動を排するならば、大東亜戦争もまた日本人が戦った数多（あまた）の戦争の一つにすぎないとする思索は至極論理的である。この戦争だけを殊更感傷的に見つめる必然性はない。ただ、中高年の日本人にとって、大東亜戦争を「第一次大戦の単なる次の戦争」と切って捨てるだけの時間が経過していないだけの話なのである。

筆者もまた時の流れに抗いたい中高年の一人だ。顔を見たこともない筆者の父方の祖父はレイテで戦死した。筆者の亡き父は戦後困窮し、中学校にろくに通うことなく働かざるを得なかったと聞く。母方の祖父は戦時中大政翼賛会の地方支部の幹部だったので、終戦後は村人に準戦犯として糾弾された。筆者自身は飽食の時代にぬくぬくと育ったとは言え、戦争は決してファンタジーの世界の出来事ではない。

何が何でも前（さき）の戦争を風化させてなるものか。戦争を経験した世代の方の体験を是が非でも次代に伝えねばならぬと筆者は決意した。御高齢の世代から戦中期の回顧談を聞き取り、その上での確かな質問を重ね、さらなる昔話を引き出すには、相応の近代史や戦史の知識がいる。何より昔のことをとにかく知りたいとの渴望が必要だ。となると、ネキやマルバネの採集名人には事欠かない我が日本甲虫学会ではあるが、近代史に精通し、戦時中のことを聞きたがる人材と言えば筆者しか見当たらない。

以上、根拠不確かな自負といささか過剰気味の使命感のもと、約5年前から筆者は「戦前生まれの御高齢の虫屋に戦中期の体験を聞いて回る全国行脚」を始めた（注2）。このような経緯で、筆者は平成28年6月25日、東京西池袋の黒佐家の門を叩いたのである。

III. 褒められると嬉しい

平成28年に黒佐先生宅にお邪魔すると、自宅の机の上には「保科さま 写真は撮らないでください」との置き紙があった。また、口でも同じこと

を言われた。最初から写真を撮るつもりはなかったのだが、先生によれば「みっともないから」が理由らしい。

先生は老いたりと言えど、虫に対する情熱は錆びついておられなかった。先生曰く、自分は野外観察等で知りえたことを論文で発表する前に人にペラペラ喋ってしまう癖があるとのこと。しかし、その話を聞かせた人に先に発表されたことが過去に何度かあり、相当憤激しておられた。確かに、虫業界に身を置いていれば似たような話の一つや二つは耳に入って来る。先生は研究倫理には厳しい一面をお持ちであった。

この頃先生は既に甲虫研究の第一線から身を引かれていたとは言え、机の上には綺麗に展足されたゴミムシ標本が多数並べられていたし、最新知見を把握する努力を怠らなかった。『Elytra New Series』や『さやばね』は隔々まで目を通されておられた。そして、個々の虫屋の研究姿勢にも一言をお持ちであった。黒佐先生が最大級の評価をしていたのは吉富博之・前さやばね編集委員長で「吉富君は大変良くやっている。物凄く勉強しています」と褒めちぎった。一方で、「○○君は某ムシの日本一の大家だ。でも、ポロポロと小さい論文を書くだけだ。彼にはもっとまとまった論文を書いて欲しい」と苦言を呈された。

筆者は「これはヤバイぞ」と内心大いに焦った。と言うのも、先生のすぐ手元にある『Elytra New Series』当時の最新号 vol. 5 (2) には、ポロポロ書いた単発記載の Hoshina (2015) が掲載されているのである……。しかし、世の中何が幸いするかわからない。黒佐邸を訪問する3か月前、筆者は吉富前委員長に執筆要請され渋々嫌々引き受け、もとい大感激で号泣しながら連載開始していたヒゲブトチビシデムシの概説第一回目が『さやばね』21号に掲載されたばかりであった(保科, 2016)。この概説は黒佐先生のお眼鏡にかなったらしく、「あなたは大変よく勉強していますね」と何回も褒めていただいた。賛辞対象はどうやら概説そのものと言うよりは、その中で引用している Hoshina (2009) だったもよう。何はともあれ筆者も所詮人の子、小市民。褒められて悪い気はしない。余人を称賛される際の「よく勉強している」との言葉は先生の口癖のようである。とりえず先生からの最初の難関? は吉富前委員長の機略で乗り切れた感じである。

IV. 筆者と黒佐先生は同郷人

黒佐先生とお話しているうちに、これまで黒

佐先生が住まれた土地のいくつかの箇所が筆者にも縁があることがわかってきた。先生は大正10年6月、岡山県勝田郡公文村に生まれた。黒佐とは先生の妻方の名字であり、旧姓は谷口である。筆者は「私は岡山県和気町の隣の熊山町の岡山白陵高校の卒業生である」と申し上げた。そして「そうですか、和気と言えば和気清麻呂ですね」「はい。高校時代に和気清麻呂の銅像を見に行ったことがあります」などと岡山ネタで盛り上がる事ができた。

黒佐先生はその後、神戸市板宿に移られた。筆者は神戸生まれの神戸育ち。岡山白陵高校時代は実家を離れ、寮生活していただけである。筆者は今なお「自分は神戸市民である(≒我福井県民に非ず)」との強い自負のもと日々生活を送っているわけであるが、筆者の実家の市営地下鉄最寄り駅は板宿からたった2駅しか離れていない。さらに筆者は小学生時代に板宿の学習塾に通っていたので、同地は馴染み深い土地である。もっとも、板宿は平成7年の大震災で大きな被害を受け、その後の復興で筆者が知る板宿の町並みはすっかり失われた(写真1)。筆者でさえそう感じるのだから、仮に黒佐先生が生前に現在の板宿を再訪されたとしても、ご自身が幼少時に過ごされた板宿の面影の片鱗を見つけることは困難だったはずだ。

板宿にお住いのころ、先生は神戸多井畑で昆虫採集をされた。現在多井畑厄神八幡宮や奥須磨公園がある多井畑は、筆者は通っていた小学校の遠足でこれまで何度も訪れた場所だ。実家の近所と



写真1. 現在の神戸市須磨区板宿。

言ってもよい。今日多井畑には高層マンションも建っているが、平安末期以来の由緒ある八幡宮の神社林に加え、昔ながらの田園風景も残っている。黒佐少年が虫捕りした景観は多少なりとも残存しているはずである（写真2, 3）。なお、筆者は帰省した折に多井畑へ赴き、写真を多数撮った。そして「お慰みになるかもしれません」と先生のもとへお送りしたが、何かしらの返事はいただけなかった。先生が現在の多井畑の風景を見て、己の幼少時代を懐旧できたかは不明である。

黒佐先生は旧制甲南高等学校に進学された。現在の甲南高等学校（芦屋市）である。この神戸在住時代、先生は九州大学昆虫学教室初代教授の江崎梯三と文通を始めた。加えて、江崎の中学時代の同級生である戸澤信義の知遇を得ることとなる。戸澤は『関西昆虫雑誌』の幹事であり、京阪神昆



写真2. 現在の神戸市多井畑。

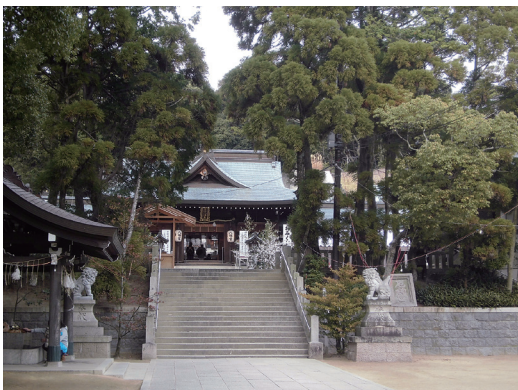


写真3. 多井畑厄神八幡宮。かつて虫捕り網を持った黒佐少年はこの石段を登ったか。

虫界の大物だ。江崎の回想談にも名前が出て来る（江崎, 1984）。

黒佐先生は戸澤に大層気に入られた。先生は「戸澤さんは関西学院近くの図書館の館長を務めていた」と回想された。『図書館界』47巻4号（1995年）に掲載された戸澤の略歴によれば、戸澤は昭和14年に宝塚文芸図書館長に就任しており、間違いなくこのことである。戸澤は資産家で、自宅に国内外の昆虫関係の本をずらりと揃えていた。黒佐先生は戸澤に「この本は僕がいない時でも勝手に出入りして、好きに利用してよい」とまで言われ、黒佐先生は盛んに戸澤所蔵の昆虫学の専門書を読み漁った。

V. 「来年の桜は見れますかねえ？」

黒佐先生は文通を通して江崎からカメムシのことを学んだ。先生には九州帝大に進学し、江崎のもとで昆虫を研究するとの夢が沸々と持ち上がってきた。昆虫の恩師とも言うべき戸澤信義の勧めもあったのかもしれない。しかし、町医者だった父親に「昆虫学では食えない。九大に行くなら学費は出さない。お前は大阪帝大医学部に入れ」と言われた。家父長制の強かった戦前である。先生には父親に逆らう術はなく、やむなく同大の医学部に進学することとなる。

大学進学時には実家は神戸市の灘に転居していた。黒佐先生は阪急電鉄で灘から片道1時間かけて大阪帝大に通った。そして在学中の昭和16年12月8日大東亜戦争勃発。真珠湾奇襲成功の知らせに大阪帝大は興奮の坩堝と化した。当時の阪大生たちは強大な米国と戦争しても勝てぬと冷静に見る者が少なくなかった。特に医学を学んでいた学生であれば、日米の科学技術力の差を痛感させられる機会もあっただろう。それゆえ、阪大医学部生たちにはいずれ米国との戦争は避けられぬかも、との悲壮感はあったが、まさか弱い日本から戦いを仕掛けるとは誰も予想していなかった、と黒佐先生は語る。阪大キャンパスのあちこちで「やったぞ!」との狂喜の声が上がった。日本軍の緒戦の大勝は阪大生たちの対米戦争への不安を吹き飛ばしたのである。

先生からは、開戦前米国は日本を経済的に締め付けていたとか、戦争中大本営は嘘ばかり発表していたとの解説もしてくださった。近代政党の離合集散史を何も参照せずに紙にスラスラ書くんぞ朝飯前と言う近代史通の筆者にとって、先生の解説は釈迦に説法でしかない。もっとも、筆者が「はあ、そうなんですか!!」と、さも役に立つことを

聞きました、との大人の対応をしたことは言うまでもない。

昭和17年6月のミッドウェー海戦の大敗により、開戦直後の連戦連勝の我が軍の勢いは朝露の如く消え失せた。以後、大日本帝国は破滅の坂を転がり落ちていく。時局が次第に切迫する中、黒佐先生は昭和19年8月阪大を繰り上げ卒業。そして翌月の9月には海軍軍医学校に入学。先生曰く「横浜の軍医学校」とのことだったので、海軍軍医学校戸塚分校に入校されたと思われる。阪大の同期の多くは陸軍に入った。しかし、先生は泳げないにもかかわらず、4年上の先輩に誘われて海軍を選んだと言う。

大阪帝大卒業の翌月には横浜の軍医学校に入学するとの慌ただしい中、先生は同年8月6日に横浜市戸塚区原宿で、同月17日には東京大森区大岡山でクロハラカマバチを捕った。そして、その採集成果をすぐに雑誌『昆虫世界』に投稿されている(谷口, 1944)。戦局の悪化は日本の国力を著しく損耗させていたが、先生の虫への情熱だけは削ぐことができなかったのだ。

軍医学校入学後は医術修行よりも体力作り優先とのことで、とにかく走らされた。戸塚から江ノ島までマラソンをさせられたこともあったと言う。この他、苦手であった水泳もさせられた。

軍医学校在籍中、先生は日本軍の絶望的な戦局の状況を詳しく知ることはできなかったが、「どうも戦争の旗色が悪そうだ」程度の自覚はあった。そこである時、軍医学校の教官に「我々は来年の桜は見れますかねえ？」と質問した。すると即座に「ハハハ、無理だろうな」と笑い飛ばされた(=来期ノ櫻観ル事能ハス)。「来年の桜は見れますかねえ？」先生は筆者の前で数回同じ言葉を呟かれた。先生の頭の中では70年前の場景が幾度となく繰り返されていたに違いない。

「日本は実は負けているのではないか？」先生の不安は的中した。軍医学校卒業間近のある日。教官は生徒の前で「重大発表がある」と宣言した。「大本営の発表では、日本海軍は何百隻もの軍艦を保持していると言っているが、実際は全く違う。実際に動く軍艦は4隻しかない」と明かした。黒佐先生ら生徒は皆大変驚き呆然とした。酷い話だ。威風堂々たる大連合艦隊に乗り込む軍医を養成するとの触れ込みで生徒を集めておきながら、卒業間近になって無事に動く船はたった4隻です、などと詐欺も同然である。現在なら「話が違うではないか」と、すぐに消費生活センターにダイヤルを回すところだ。筆者は「その時、海軍当局に騙

されたとお怒りになられなかったのですか？」とたずねたが、当時の先生はただただ力なくうな垂れるだけであったと言う。

VI. 虫捕りのため南方勤務を志願す

黒佐先生が海軍軍医学校を卒業されたのは昭和20年3月である。軍医中尉となった黒佐先生は卒業時にどの艦隊への配属を希望するか、と学校側に聞かれたので、「南方勤務を望む」と答えた。ここで「内地の部隊がいい」などと言おうものなら、教官に殴られるのは目に見えていた。それならば、南に行けば熱帯の虫が捕れるだろうと安直に考え、南方赴任を志願したわけである。黒佐青年は生と死の狭間にあっても尚も虫屋たらんとした。余談であるが筆者は「虫業界の長老から『戦争中、熱帯の虫を捕りたかったから南方勤務を志願した』との話を聞いた」と書いたことがある(保科, 2018a)。この長老とは実は黒佐先生のことである。

黒佐先生は希望通りシンガポールを基地とする第一南遣艦隊の司令部付きの発令を受けた。しかし、いつまでたってもシンガポールに向かうことができない。もはや制海権は完全に敵軍の手に落ち、輸送船に乗って赴任する手段は失われていた。船が駄目なら飛行機しかないが、「一介の中尉のために飛行機を飛ばせるか！」とのことで、南方に向かうこともできず、徒に時だけが過ぎて行った。結局、先生は海軍省の命令で大分県の佐伯海軍航空隊に着任することとなる(注3)。

先生によれば佐伯の海軍航空部隊の主任務は、豊後水道を通る米軍潜水艦の偵察であった。佐伯市は海軍最前線の土地柄だったので、よそ者の先生にとっても過ごしやすかった。偶然ではあろうが、赴任前は霜焼けに悩んでいたのに、佐伯に着いたとたんになぜか直ったそうだ。先生が戦後も佐伯市に留まった背景には、この住み心地の良さがあった。なお、佐伯市が海軍最前線だったのはちゃんと理由がある。昭和6年九州東海岸に海軍航空隊設置の計画が持ち上がると、候補地となった当時の佐伯町は(昭和16年に市制施行)、宮崎県富高町と航空隊誘致を激しく争い、町一丸となった陳情の末、佐伯が誘致を勝ち取ったとの経緯があった(佐伯市史編さん委員会編, 1974)。

幸か不幸か配属先の熱帯で色取り取りのチョウを捕るとの夢は潰えたわけだが、先生は大分でもやっぱり虫捕りをしていた。敗色濃い中、軍人が呑気に虫捕りなんてできたのか？との疑問が湧く。しかし、意外にも先生は基地司令にどやされることはなかった。先生が基地司令室に入る時、「谷口

中尉！入ります！」と敬礼して入室するわけだが、司令の中佐からは「中尉！貴様の声は甲高くて将校らしくない！もっと将校らしい声を出せ！」と理不尽な叱責を受けることもあるにはあった（注4）。先生曰く、どうも基地司令は自分が虫捕りをしていることを薄々知っていたのではないかとのこと。しかし、さすがに基地司令の目の前で捕虫網を振り回すことはなかったし、司令との関係も悪くなかった。また、何と言っても先生は将校である。よって下士官や一般兵からの監視の目もそんなに気にする必要もなかった。

後日談であるが、戦争中先生が虫を捕っていたことは周囲に知れ渡っていたと思われるフシがある。と言うのも、終戦直後、知り合いでも何でもなかった佐伯市長の息子がいきなり訪ねてきて「うちで虫捕りをしませんか？」と誘われたとの話があるからだ。そして、先生は実際市長の家の防空壕に生えていたキノコに集まる虫と一緒に捕った記憶があると言う。どうやら「航空隊に虫を捕っている変なヤツがいる」との噂は市内に広まっていたようである。

先生は軍医なので直接銃を手にとって戦うわけではなかったが、死は常に隣り合わせであった。米軍グラマン戦闘機の機銃掃射を受け、狭い溝に飛び込んで、危うく難を逃れたこともあった。軍隊と言う組織は1日でも早く中尉になれば先輩として威張っていた。基地には2人の先輩中尉がいたが、先生はすぐに2人を追い越し“キャップガン”になった（注5）。なぜなら、2人の先輩中尉は先生着任後すぐに戦死したからである。先生は「これが戦争だ」としみじみと思い知らされたと言う。

戦局は日に日に悪化していった。黒佐先生は戦争中この佐伯市で後に奥様とされる女性と知り合っていた。その馴れ初めについてはさすがに野暮かと思ひ、敢えて聞いてはいない。軍上層部は米軍が遠浅の宮崎県日南海岸に上陸する恐れありと判断していた。そして、仮に米陸軍が日南から北上し県境を越えたら、佐伯はもう目の前だ。先生は奥様とその友達のハルさん（春さん？）に、「米軍に凌辱されそうになったらこれを飲め」と自決用の青酸カリの小瓶を一本ずつ渡していた。悲壮と言うほかない。

VII. 昭和20年5月4日。佐伯海軍航空隊B29の奇襲を受く

佐伯市及び佐伯海軍航空隊基地が米軍大型戦略爆撃機B29に最初に攻撃されたのは昭和20年4月26日である。B29が落とした一弾が防空壕に直撃

し、避難していた市民数十人が即死した（大分の空襲を記録する会、1975）。その一方で、航空隊基地の被害は皆無であったが、この日以降、軍都佐伯は米軍の波状攻撃を受けることとなる。

同年4月29日、B29を迎撃するため、陸軍の飛行第五十六戦隊三式戦闘機「飛燕」I型種主力十六機が、芦屋から佐伯海軍航空隊基地に到着した（高木、1995）。黒佐先生は「陸軍の飛燕が佐伯の基地に間借りしていた」と語る（注6）。翌30日、5月1日、2日とB29が佐伯を含む九州東海岸に連日飛来した。5月3日、B29が佐伯航空隊基地に低高度で侵入、飛燕隊は発進し、米航空部隊と交戦した。翌4日、またもやB29は佐伯海軍航空隊基地を急襲、この日基地側は完全に虚を突かれた。黒佐先生も「基地がB29の奇襲を受けた」と回想する（注7）。高木（1995）によると、この日も飛燕隊は豊後水道を北上中のB29の編隊と勇戦していたのであるが、悲運にも燃弾補給のために飛燕隊が基地に着陸していたその時に、敵編隊の最後尾機に基地を爆撃されたのである。黒佐先生の目の前で、地上で整備中の飛燕が次々と炎上した。頼みの綱の飛燕隊の壊滅は目撃していた佐伯市民を大いに落胆させたと言う（武田、2008；2009）。

佐伯海軍航空隊基地は大混乱に陥り、死傷者が続出した。爆風で吹き飛ばされた人の足が5、6m先の松の木の上に引っかかった。軍医だった先生は破片で腹をやられた一人の重傷者を車で別府の海軍病院に運ぶ任務を与えられた（注8）。基地では満足な治療ができなかったからである。先生が治療にあたったこの兵士は、入隊前は経済学を学んでいたと言う。兵士は不安になったのであろう、車中で「谷口中尉！自分は大丈夫でありますか？！」と必死に救いを求めてきた。先生は「大丈夫だ。心配するな！」と懸命に励ましたが、結局この兵士は別府に辿り着く前に死亡した。この話をされた時、先生は少し涙ぐまれた。筆者は辛いことを思い出させてしまったか、と申し訳なく思った。

VIII. 焦土と化した神戸を臨む

大惨事となったこの昭和20年5月4日の前か後の話かはわからない。先生は横須賀（横須賀海軍鎮守府のことか？）に出張を命ぜられた。毒ガスの講習を受けるためである。ただ、講習会では化学の基本的なことばかり聞かされ、「わざわざ横須賀まで来るほどのことでもないな」と感じた。心を揺さぶられたのは、鉄道で横須賀へ向かう途中、車窓越しに映った、空襲で焼き尽くされ噴煙上がる郷里神戸の惨状であった。人とは焼け野原となっ

た故郷を臨んで一体何を想うものなのか。黒佐青年の胸中渦巻くものは何であったか。戦後のオイルショックすら「社会の教科書に載っていた」時代の筆者には先生の心中察するに余りある。

また、横須賀からの帰任の途中、先生は明石で兄に、岡山で疎開中の母親に会った。そして、「お母さん、僕はまだ生きています」と報告した。何と言う時代であるか。人の世とは親が子を見送るのではない。子が親を看取るのである。「今のところ生きています。」子が母にこのように告げなくてはならぬこと、終戦の年すら満足に言えぬ昨今の大学生は何かを感じ取ることができるのであろうか。

佐伯海軍航空隊基地の飛燕隊が潰滅して約1か月半後の昭和20年6月下旬、黒佐先生は沖縄の陥落を知る。翌月の7月、主力を失った佐伯海軍航空隊は呉鎮守府第八特攻戦隊に編入された（大分県総務部総務課編、1988）。筆者が黒佐先生に神風特攻隊についてたずねたところ、「特攻機は佐伯の基地からは発進していない。特攻隊となるべく多くの若者が鹿児島へ向かった。しかし、幸いにもこれらの人々は出撃することなく生きて大分に戻って来た」と述べられた。

どうも曖昧である。佐伯海軍航空隊の基地で特攻隊員が選抜されたのか、それとも他の基地で選ばれた隊員が単に佐伯の基地を経由しただけなのか。もし、佐伯で編成されたのであれば、先生はその場に立ち会ったのか。特攻隊員たちは指名された時如何なる面持ちであったのか。先生は特攻隊員と話をする機会があったのか。次々と聞きたいことが沸き上がって来た。しかし、筆者は結局これらの質問を全て封じてしまった。先生は作戦を意思決定する立場になかった若手軍医とは言え、歴とした将校である。戦後生き残った将校軍人の方に神風特攻隊のことを根掘り葉掘り聞くのは躊躇いがあった。

黒佐先生が逝去されたとの知らせを受け、筆者は慌てて佐伯海軍航空隊基地のことを調べ始めたわけだが、そこで昭和20年7月以降、同基地が特攻艇『回天』の出撃拠点になっていたことを初めて知る（佐伯市史編さん委員会編、1974）。防衛庁防衛研修所戦史部（1979）によると、佐伯基地所属の特攻隊は特攻艇『海龍』十二隻からなる第二十四突撃隊第十海龍隊であり、実際に回天が佐伯に配備されたかどうかは不明だ。しかし、佐伯航空隊が第八特攻戦隊に付属していたことは事実である。果たして先生は特攻作戦をどこまで御承知であったか。やはり先生に不快に思われたとしても、特攻についてもっと詳しく聴取すべきだっ

た。勇気を出して踏み込むべきであった。この点だけは悔やんでも悔やみきれない。

昭和20年8月、先生は新型爆弾（原爆）が広島と長崎に落とされたことを知る。そして同月15日、大日本帝国は終焉の日を迎えた。先生は玉音放送を確かに聞いたらしいのだが、ラジオの調子が悪かったのか、よく聞き取れなかった。したがって日本が降伏したことすら、すぐにはわからなかった。しかし、終戦翌日から米軍グラマン戦闘機が基地の上を低空で旋回し、「なぜこんなことをするのだろう」と不思議がった。そして、漸く祖国の敗戦を知ったのである。

戦争が終わって「死なずに済んだ。助かった」との思いが先生にあったのは事実だと言う。先生は戦争中戦死を覚悟し、やけくそ気味だったので、結婚は諦めていたそうだ。さて、筆者は戦前生まれの虫屋の方にヒヤリングする際、「日本の無条件降伏を知った時、何を思ったのか」と必ず聞く。筆者としては「今後の日本の行く末が心配になった」「敗戦が悔しくて嗚咽を漏らした」等の返事を期待しているわけだが、実はそのような回答が返ってきたことはあまりない。長老の方々の返事はおおよそ黒佐先生と同じである。「やれやれ、終わった、終わった」と言うのが当時の多くの国民の偽らざる思いだったのであろうか。

IX. 見た目がイメージと違う？

戦後も佐伯市に留まった先生は昭和25年に同市で内科医を開業。次いで昭和31年奥様を伴われ上京した。ただ、この時代以降の話となるともはや筆者の関心外なので、先生が東京で如何なる研究活動を行われたかについては殆ど何も聞いていない。それらについてはゴミムシ屋仲間の方々の追悼文に譲ることとしよう。

筆者は黒佐先生に「あなたは優秀だから、もっとデリケートそうな人を想像していた。いや、大変失礼だが見た目はずいぶん違いますね」と笑われた。見た目がデリケートそうな人とは、甲虫学会で言うと例えば誰なのか、と聞き返すべきであったか？なお、筆者は旧日本鞘翅学会例会で先生と何度もお会いしているのだが、先生はどうもおお忘れで、御自宅訪問日が筆者との初対面と勘違いされていた。もっとも、この点につき先生に指摘するのは差し控えた。

筆者が先生の御自宅でヒヤリングしている最中、地区の年配の女性が町内会費の徴収に来た。話を盗み聞きするつもりはなくとも、どうしても自然に会話が耳に流れて来る。この頃、先生の奥様は

体調を崩され、御息のおられる長野県に移られていた。集金に来た女性が「奥様は息子さんの近くにいたなら安心よねえ」と言うので、先生は「うん、うん」と何度も頷かれていた。筆者は戦争の荒波を共に乗り越えた夫婦の絆は戦後生まれの日本人には中々推し測れない、との思いに至った。

X. 謝辞

黒佐和義先生のご逝去と命日をいち早くお知らせくださった本会会員の森田誠司氏、そして貴重な文献の複写物をお送りくださった大林延夫元日本甲虫学会会長に厚く御礼申し上げる。

XI. 注釈

(注1) 筆者はフィクションとしての宇宙戦艦ヤマトは好きである。念のため。

(注2) 筆者は「昆虫業界は今のように戦争を経験した世代からヒヤリングを取るべきだ」との考えを明確に示したことがある。同時に「虫屋は未来のことは考えるが、後ろを振り返らない人種だ」と皮肉った(保科, 2018b)。残念ながら、筆者の考えに共感してくれた方はたった一人であり、筆者の提起は完全無視されている。保科(2018b)では、戦前生まれの方へのヒヤリングと同時に「標本箱を自分好みに塗装すべし」と阿呆なことまで推奨したのが失敗だったか。どれだけ真面目な提案をしようとも、ふざけた発案とセットであれば、共々一笑に付されるだけとの好例かもしれない。

(注3) 以降に記す佐伯海軍航空隊時代の先生の回相談は必ずしも時系列に沿ったものではないと思われる。その点は注意していただきたい。

(注4) 黒佐先生は「基地司令の中佐」との表現が使われた。しかし、高木(1995)によれば、航空隊司令は野村大佐とある。先生が「司令」と呼んだ上官はおそらく野村大佐のことと思われる。

(注5) 士官が使用する部屋をガン・ルームと言う。そして、部隊所属の士官の中で最も先任で威張っている士官を「キャップ オブ ガン・ルーム」、略して「キャップガン」と呼んだらしい。

(注6) 黒佐先生が何気なく発した「間借り」との言葉、つまり「陸軍の戦闘機が本来の着陸場所ではない海軍航空隊基地にいた」との発想に日本軍の致命的欠陥が表れているように思える。日本陸軍と海軍とはとにかく仲が悪く、互いに完全独立して戦力の統一的運用ができなかった。ただでさえ乏しい国力を陸海軍で二分してしまったことが日本の敗因の一つである。

(注7) 筆者は黒佐先生から B29 の攻撃を受けた

月日を聞いたわけではない。ただ、高木(1995)の戦史と突き合わせると、先生の回想談は5月4日のことであると判断して間違いはない。

(注8) 当時基地配属の一人の見習士官は「飛行場西側の防空壕に向かおうとしたが、助けを求める負傷者の声を聞き、引き返して衛生隊に駆け込み軍医に数名の衛生兵を乗せたトラックの出動を要請した」と回想している(高木, 1995)。この軍医とはもしかしたら黒佐先生のことであろうか。

引用文献

- 防衛庁防衛研修所戦史部, 1979. 戦史叢書. 潜水艦史. 朝雲新聞社. 491 pp.
- 江崎梯三, 1984. 京都『昆虫学雑誌』発刊当時の秘話. p. 241-257. 江崎梯三著作集第二巻. 思索社. 419 pp.
- Hoshina, H., 2009. A taxonomic revision of the subfamily Coloniinae (Coleoptera: Leiodidae) from Japan and Taiwan. *Tijdschrift voor Entomologie*, 152: 237-286.
- Hoshina, H., 2015. New record of the genus *Creagrophorus* (Coleoptera, Leiodidae) from the Ryukyus, Japan, with description of a new species. *Elytra, New Series*, 5: 315-317.
- 保科英人, 2016. 日本産ヒゲブトチビシデムシ類要説(1). さやばね, ニューシリーズ, (21): 1-7.
- 保科英人, 2018a. 明治百五拾年. 近代日本ホテル売買・放虫史. 伊丹市昆虫館研究報告, (6): 5-21.
- 保科英人, 2018b. 明治150周年. 新時代の土壌性甲虫の楽しみ方. ~落ち葉下の数ミリのマルバネクワガタ. 月刊むし, (568): 2-9.
- 大分県総務部総務課編, 1988. 大分県史. 近代篇IV. 大分県. 612 pp.
- 大分の空襲を記録する会, 1975. 大分の空襲. 大分の空襲を記録する会. 346 pp.
- 佐伯市史編さん委員会編, 1974. 佐伯市史. 佐伯市. 1029 pp.
- 高木晃治, 1995. 足摺の海と空. 「飛燕」戦闘機隊上野少尉機帰還せず. 近代文藝社. 317 pp.
- 武田 剛, 2008. 佐伯海軍航空隊と連合艦隊. 私が見た幼少期の記憶. p. 119-120. 佐伯史談会編, 図説新佐伯志. 佐伯史談会. 200 pp.
- 武田 剛, 2009. 私が見た「佐伯海軍航空隊と連合艦隊」の教訓. 佐伯史談, (209): 19-26.
- 谷口和義, 1944. クロハラカマバチの新産地. 昆虫世界, (565): 10.